笑いましょう、ワッハッハッ

今野尚子

笑い声、といったらどんな擬声語を思い浮かべるであろうか。標題は「手をたたきましょう」という歌の後半である。「笑いましょう、ワッハッハ、ワッハッハ」と笑って、「ああ、おもしろい」と結ぶ。笑い声としてこの「ワッハッハ」や「アハハ」など「はは」の形を思い浮かべる人も多いのではないだろうか。笑い声にもいろいろあるがここでは屈託のない高笑いを中心に、笑い声を追ってみたい。

今昔物語集につぎのようにある。

應天門上層ヲ見上バ真サヲニ光ル物有。暗ケレ何物トモ不見ヱヌ程、嘘ヲ頻リニシテガ、ト咲ケル。（巻第二十七第三十三）

ただし、古典文学大系本の頭注には「キャッキャッと」とあり、正体のわからないものの鳴き声と考えられる。「かかなく」や「かかめく」の「かか」と同じで、人の笑い声ではないようである。

このほかには、古い時代の文献に日本人の笑い声そのものを見出すことは意外に困難である。

室町時代に入ると、「からからと」という笑い声を見ることができる。

兵共双仏殿ニ立帰リ、（中略）御経ヲ皆打移シテ見ケルガ、カラ〳〵ト打笑テ、「大般若ノ櫃ノ中ヲ能々捜シタレバ、大塔宮ハイラセ給ハデ、大唐ノ玄弉三蔵コソ坐シケレ。」ト戯レケレバ、（後略）

（太平記巻第五　大塔宮熊野落事）

狂言にも見られる。

まづそれがしはから〳〵とわらふてのかふ

（すはじかみ）

ロドリゲスの日本大文典にも

Caracaratovarô（からからと笑ふ）。

とあって、「最も普通の」擬声語・擬態語のひとつであったことが知られる。また日葡辞書にも「Caracara」、「Caracarato」を掲出し、「大笑いするさま」と註する。運歩色葉にも「諕（カラ〳〵ト）咲」とある。「咲」は今昔の例にもあるとおり「わらう」ことである。このような例を見ると、室町時代、愉快に笑う声は「からから」と表わされていたようである。

江戸時代に入っても近松の時代物などでは「からから」あるいは「かっらかっら」、「かんらかんら」が高笑いの声としてしばしば登場する。

かげきよこれを見て。（中略）あたまをたたいてからからとわらひ。

（出世景清9ウ）

其くせに色の道にハきんもつの。くハゐ

がすきな物じやとてかんら〳〵とぞわらひける。　（源義経将棊経4ウ）

世話物にも「からから」は見られる。

ゆらから〳〵と笑ひ。ヤアしほらしいこしぬけ殿。やうすをいふて聞世申さん。

（掘川波鼓19ウ）

ところで、この近松に「ハハハ」、「ワハハ」という「はは」形の笑いが見られるのである。

一当あて引かづいてうんと投。ハ、〳〵〳〵〳〵。こりや庚相でごハりまする。ごわりまするとそらとぼけ

（心中宵庚申14ウ）

ないつエ、〳〵。ワハ〳〵〳〵。笑うつきやうらんの。身のはて何と浅ましや。

（心中天網島3ウ）

これ以降の時代になると、「からから」はむしろ少なくなり、逆に「はは」形が多くなる。

孔「箒千里。是留とめが掃ざる所なりだ。アハ、、、留ハ奥を潤し床ハ身を潤すといふから。　（浮世床初上18オ）

「ヲツトまづ一ツ閔子騫三人

「ハ、、、、、　（同右初上18ウ）

右は浮世床初編から「アハハ」と「ハハハ」の例をそれぞれひとつずつあげた。つぎは七偏人の例である。

源「ほんにノウお前の力で捻られては堪るめへアハ、、、　（七偏人初中）

明治時代に入っても「はは」形の笑い声は優勢である。

（小）アハ、、、、。鹿馬ア言ひたまへ。

（当世書世気質第一回）

「アハ、、夫が落ちなんですか、こりや面白い」と主人はいつになく大きな声で笑ふ。　（吾輩ハ猫デアル二）

「ハ、、、、艶罪と云ふ訳だ」（中略）すると又垣根のそばで三四人が「ワハ、、、、」と云ふ声がする。

（同右　三）

以上、室町時代には「からから」が一般的であった笑い声が江戸時代の前期から「はは」形に移っていく様子をながめた。

日本語の上代以来の音韻変化のなかに、ハ行子音音価の変化がある。ハ行子音は古い時代には両唇音のΦ、さらにさかのぼればPであったというのである。言語は恣意的なものとされており、たとえば木の葉が日本語で「は」とよばれることは木の葉そのものと何の必然的関係もない。したがって「は」が音韻変化をこうむって／pa／→／Φa／→／ha／と変化しても、そのことによって「は」という語そのものは影響をうけない。しかし一方、恣意的とされる言語のなかでは例外的な語群がある。擬声語である。ハラハラ・パラパラ・バラバラの三つを比べればわかるとおり、／h／か／P／か／b／かということがこの三つの語を区別する重大な要素となっている。いいかえればどのように聞こえるか、が擬声語にとっては重要なのである。ハ行子音の音価の変化はこの場合、看過できない大きなできごとなのではないか。現在「はは」形で表わされる笑いは大声で豪快に笑うものである。この笑い方が基本的に変化していないとすれば、唇はこの笑いにかかわっていない。したがって「は」の子音が両唇音であった時代にこの笑いを「は」で写すことはなかったはずである。そして最も近い「か」でこの笑いを写したのではないだろうか。ハ行子音の変化の時期は江戸前期ごろとされている。とすれば近松に「はは」形の笑いが出現することもうなずかれよう。